

元 気 の 源 通 信

目標設計・人事労務・社会保険事務手続き・助成金

社会保険労務士 深川順次

福岡市東区香椎4-11-17-201

TEL 092-661-0552

(今月の言葉)

- ① 世界の王選手を、世界の王監督にしたかった。
- ② 野球人生最大の屈辱の日です。(韓国にアジア予選に続き連敗したとき)
- ③ 結果的にそうなったという世界一ではなく、獲りにいって獲った世界一です。(WBC イチロー)

2006年4月号(第49号)

王ジャパン世界の頂点へ。韓国戦にまさかの2連敗。どん底を見ました。その時点で「99.9% (準決勝進出は)ない」(王監督)と思われました。しかし神は日本チームを見離しませんでした。アメリカがメキシコに負け準決勝進出。ついに宿敵韓国を破り、キューバを撃破しました。世界一になったとき王さんがイチローの手を高々と掲げている。イチローは甲子園球児のような笑顔で応えている。『週間ベースボール』の表紙が象徴しているように、イチローなしには世界一はありえなかったといえます。イチローに焦点を当てながら、WBC勝利の要因を探ってみたいと思います。

諸君はすばらしい。今日とはことんやろう。

(祝勝会での王監督の言葉)

志の大きさが全てを決定する

「世界一を獲りたい」という志の高さにおいて、イチローに比肩する選手はいなかったと思います。イチローは「えーこれがイチロー」と思えるほどに喜怒哀楽をあらわにし、選手達を鼓舞激励して、世界一の原動力になりました。

「イチローさんは出る以上は世界一になりたいと熱く語っていたし、僕もちゃんとやっておかないと、合流した時にイチローさんに怒られるから手を抜かずに練習した」(松坂)

「あのイチローさんが必死だったので、僕らはもっと必死になった」(上原)

しかしこの日本チームの志気を大きく上回ったのが第2ステージまでの韓国チームでした。大リーグで活躍している選手、日本で活躍している選手を集めたナショナルチームを作り、用意万端で臨み、日本、アメリカを撃破し6戦全勝で決勝トーナメントに勝ち進みました。王ジャパンは2度までも敗北、イチローをして「野球人生最大の屈辱」とまで言わしめたわけです。

これに比して優勝候補のナンバーワンにあげられていたアメリカチームのふがいなさ。対戦表も審判をメジャーリーグ主導で決めながら、勝利したのは「誤審」による日本戦だけでした。おそらく志気においても準備においても一番劣っていたのがアメリカチームだったのではないのかと思います。

WBCでわかったことは、メジャーリーグの選手達は多国籍軍(ほぼ3割近くはアメリカ以外の選手、特に中南米)。その有力選手達がナショナルチームにもどれば、戦力にはほとんど差がないということです。それゆえ志気の強さこそが勝敗を決したということです。

日本チームは、これを韓国チームから学びました。「韓国に国の威信をかけた闘いというか、命のやり取りをするような厳しさを教わったような気がする」(松坂)。そして「最大の屈辱」をバネに準決勝で韓国を破り、決勝戦でキューバを撃破したわけです。

WBC世界一の原動力となったイチローの志の高さを支えたもの、それは日本人としてのアイデンティティを誇りとともに掴み取りたいということと、チームとして頂点を極めたい、喜びを分かち合いたいという強い欲求だったと思います。(勝手な解釈ですが)

チームとして世界一の達成感をあじわいたい

1 昨年イチローは、シスラーの年間最多安打を更新するという偉業を成し遂げました。数々の個人記録を打ち立て、個人としては頂点を極めたとも言えます。イチローのすごさは、チームの勝敗に関係なくモチベーションを保ちつづけることができること、1打1打に集中できることにあると言えます。裏を返せばチームの勝利よりも自分の成績にこだわるというクールな男だとみられていました。

しかし個人として偉業を成し遂げたイチローは確実に変わろうとしています。「今のテーマは人間くさいこと」「情熱のイチロー」です。これを端的に表現したのがWBCでした。喜怒哀楽を爆発させチームリーダーとして日本チームを牽引しました。イチロー以上に日本チームとして世界一の達成感をあじわいたいと感じていた選手はいなかったでしょう。それほどまでに日本人としての存在感、チームとしての一体感に飢えていたとも言えます。

特にこの2年間は、所属するマリナーズは低迷を続けていました。去年はダントツ最下位です。イチローがいくらヒットを打っても勝利に結びつかない、悔しさ、むなしさ、チームメイトと同じ気持ちで一つの方向に進む一体感を持ってないと痛感していたと思います。

そういう状況の中でのWBC開催決定。松井秀喜や井口が態度を保留する中、イチローはすぐさま参加を表明しました。そして熱く語り始めたわけです。

「日本人だけのチームで野球するのは久しぶりだし、すごく新鮮です」「同じ野球で育った日本人だからこそ、共有できる意識というのがあるんです」「違う達成感も生まれるし、(世界一の)可能性があるならそれを作り上げてみたい」(イチロー)

また大会後のコメントで次のように述べています。

「野球をやっていて、これだけチームメイトと同じ気持ちでひとつの方向に進んだことが僕にはないですし、本当にいい仲間巡りに巡り合えて、も…、やばいっすね。本当に感謝しています」

「孤高のイチロー」から「チームリーダーのイチロー」へと確実に変身していると感じさせるWBCでした。

常に限界への挑戦

求道者イチローの心を一言で表現すれば「常に限界への挑戦」ということでしょう。

「僕は僕の能力を知ってますから、いくらでも先はあるんですよ。人の数字を目標にしているときというのは、自分の限界よりはるか手前を目指している可能性がありますけど、自分の数字を目指すということは、常に限界への挑戦ですから、メジャーで感じる孤独感なんて最高じゃないですか」

常に「自分のベストを超える」目標を実現するために、心・技・体を磨きつづけています。バットやグラブ、スパイクなどの道具にもすごいこだわりを持ち、一流の職人にたのんでいます。例えばプロ野球選手のバットは、約1000本のアイダモ角材から300本ほどつくれるが、イチロー仕様のバットはたったの12本しかつくれる。それほどまでに1本1本が芸術品だそうです。だからこそイチローは道具をすごく大切に扱う。フリー打撃の後に他の選手がそれぞれのバットを芝生の上に平気で放り投げ中、イチローだけはバットをグラブでそっと包み置いたとのこと。

グラブについても、名工に丹精込めてつくってもら。そして試合が終わった後、他のみんながくつろいでいるときにも必ず丹念にグラブを磨いているそうです。子供達にもまず親から買ってもらったバットやグラブを大切にすることを教えています。

まさにイチローは芸術的な道具を使い、芸術的に磨き上げた心・技・体で、芸術的なプレー「走・攻・守」をつくり上げているといえます。彼のヒット1本1本が芸術品だと言えます。

3月末から相次いでプロ野球も、大リーグも開幕しました。イチローを始めとした選手達の活躍から目が離せません。